

ジェイムズ・ジョイスの「レースの後で」

南 谷 覺 正

外国文化第一研究室

A Reading of “After the Race” by James Joyce

Akimasa MINAMITANI

World Civilizations

Abstract

“After the Race,” the fifth story in James Joyce’s *Dubliners*, although one of the less successful pieces in the novelist’s view, does disclose some of his literary hallmarks. This essay is an attempt to clarify to a degree what the author intended to imply, in terms of nationalism, capitalism, the machine age then encroaching on Ireland, the protagonist’s motives and subconsciousness, as well as the father-son relationship.

I

車はダブリンに向って疾走してきた。⁽¹⁾ Naas Road の狭い道を散弾のようになめらかな軌跡を描きながら飛んできた。Inchicore の丘の天辺に、群衆は幾つかの塊になって集まり、車が帰還していくのを見つめていた。この貧窮と不活性に充ちた海峡に、大陸はその富と勤勉を走らせていた。時折り群衆の塊は、唯々として抑圧されている人間特有の歓声を挙げた。しかし彼らの声援は、もっぱら青い車に向けられた。青い車は、アイルランドの友邦、フランスの車であった。(第1段落)⁽²⁾

しかも、フランス勢は実質的な勝利を収めていた。彼らのチームは堅実な順位——2位と3位——を占めた。優勝したのはドイツ車であったが、レーサーはベルギー人だと報じ

られた。だから青い車が丘の頂上に通りかかると、群衆からの倍の歓呼を受けた。そしてそれぞれの歓呼に対し、車の中にいる者は微笑と頷きによって応えた。これらの小綺麗に造られた車の1つに4人の青年が座っていた。彼らの精神は現在のところ、フランス語による粋なエスプリ以上の昂揚を示していた。実際のところ彼らはほとんど浮かれていた。車の所有者であるシャルル・セグアン (Charles Ségouin)、カナダ生まれの若い電気技師アンドレ・リヴィエール (André Rivière)、大きな体軀をしたハンガリー人ヴィローナ (Villona)、そして小綺麗に身繕いした青年ドイル (Doyle)——セグアンが上機嫌なのは、予期せず幾つかの予約注文が入ってきたからだった。(彼は近々パリで自動車会社を設立することになっていた。) リヴィエールが上機嫌なのは、彼がその会社の経営を委託されていたからだった。この2人の青年(彼らは従兄弟同士であった)は、また今日のフランス車の上首尾な成績によっても気分を良くしていた。ヴィローナが上機嫌なのは、とても満足のいく昼食にありつけたからだった。その上、彼は生来楽道家であった。しかし一団の中の4人目は、ひどく興奮していたものの、純粋な幸福感とは呼べない状態にあった。(第2段落)

彼は年齢が26歳ほどで、柔らかく薄い茶色の口髭を蓄え、無邪気そうな灰色の目をしていて。彼の父親は、最初は急進的な国粋主義者として名乗りを挙げたが、早々とその見解を修正した。まず屠殺業でまとまった金をつくり、やがてダブリン、及びその郊外に幾つか店舗を持ち、その金を何倍にも増やした。また、幸運にも警察関連の調達業務も手に入れて、最後にはダブリンの新聞において豪商と呼ばれるまでに財を蓄えた。彼は息子をイギリスに送り、大きなカトリック系の学校で教育させ、それからダブリン大学で法律を学ばせた。ジミー (Jimmy) は、あまり熱心には勉強せず、しばらくは悪い道にもはまりこんだ。彼は金を持っていて人気があった。その交際は、音楽仲間と自動車仲間の両方と半々につきあうという一風変わったものだった。それから彼は、世の中を少し見るために1学期間ケンブリッジに送られた。彼の父親は、息子の放蕩に対して、表向きは譴責的な態度を取ったが、心の中ではこっそりそれを得意に思い、息子の請求書を支払い、アイルランドへ呼び戻した。ジミーがセグアンに出会ったのはこのケンブリッジであった。ジミーとセグアンは今のところ、顔見知りの域をそれほど出ているわけではなかったが、ジミーはセグアンとのつきあいに大きな喜びを感じた。セグアンは世の中を実に広く知っていたし、フランスで最も大きなホテルの幾つかを持っているという噂であった。このような人物は(彼の父親も同意したが)、たとえセグアンが持っている人間的魅力を別にしても、知るに十分値する人物である。ヴィローナもつきあって楽しい友人だ——彼はピアノに優れた才能を見せる——ただ、不幸にしてヴィローナはひどく貧しかった。(第3段落)

車は、浮かれた青年の荷を運びながら陽気に走り続けた。2人の従兄弟は前の座席に、

ジミーと彼のハンガリー人の友人は後の座席に座っていた。ヴィローナが上々の機嫌であることは紛れもなかった。彼は深いバスを響かせて、何マイルもの間メロディーをハミングし続けていた。フランス人の2人は、肩越しに笑いと軽い言葉を投げて寄越し、ジミーはその素早いフレーズを捉まえるためにしばしば身を前に乗り出さねばならなかった。これは彼にとって必ずしも心地よいことではなかった。ほとんどいつも彼らの言葉の意味を素早く推測し、強い風に逆らって適切な返答を叫ばねばならなかった。それに、ヴィローナのハミングは誰の耳にもついたであろう。また車の騒音もあった。(第4段落)

空間の急速な移動は人の気分を高揚させる。人の噂にのぼることも、また金を所有していることにも同様の作用がある。これらが、ジミーの興奮の3つの主な理由であった。彼はその日、彼の友人たちの多くに、彼が大陸の人間と交わっているところを見られていた。レース・カーのチェック・ポイントで、セグアンが彼をフランス人のレーサーの1人に紹介してくれた。彼がどぎまぎ口ごもりながらつぶやいた賞賛の言葉に対し、レーサーの浅黒い顔が、白い歯列を一閃輝かせた。そうした名誉の後で、肘でつつきあったり、訳知り顔の表情を交わしあっている観客たちの俗世界に戻っていくのは気分がよかった。そして、金に関しては——彼は本当に自分の自由にできる大金を持っていた。セグアンは、ひょっとしたらそれを大金とは思わないかも知れない。しかしジミーは、一時的に自堕落な逸脱はあったものの、心の奥底では堅実な本能を受け継いでいて、こうした金を稼ぎ出すためにどれだけの苦労が必要であったかがよく分かっていた。だから過去において借金を作ったときにも、無分別を適度な限度内に抑えておくように配慮した。そして、知的奇矯さの領分に対してさえ、金銭にどれだけの労働が注がれているかをそれほどまでに意識するくらいであるから、彼の財産の大半を賭けようとしている今はそれに増すこと何層倍であろう。今回の投資は彼にとって真剣な行為であった。(第5段落)

もちろんこの投資は有望なものであった。セグアンは、友情に免じて、アイルランドの端金を会社の資本の一部に組み入れてやってもいい、という印象を与えていた。ジミーは、ビジネスの問題では、父親の目を尊敬していた。そしてこの件に関しては、投資を最初にほのめかしたのは父親であった——自動車は金になる、いいもうけになると。その上、セグアンには、紛れもない金の匂いがする。ジミーは、彼が座っている素晴らしい車を、何日分の労働に値するか換算してみようとした。何と滑らかな走りを見せたことだろう。田園の道を何と颯爽と走ってきたことだろう。車の走りは、生命の純粋な鼓動に魔法の指を触れ、人間の神経のメカニズムは、疾走する青い動物の弾むような動きに雄々しく応えようとした。(第6段落)

彼らは Dame Street を走った。通りはいつになく混雑し、自動車の警笛や、いらいらした電車の運転手の鳴らす鐘の音が飛び交った。the Bank の近くでセグアンは車を止め、ジ

ミーと彼の友人のヴィローナが降りた。エンジンをふかしている車の近くの歩道に、群衆の小さな塊がうやうやしそうに集まってきた。一行は、その晩セグアンのホテルで夕食を共にすることになっていて、それまでの間、ジミーと、今ジミーの家に滞在している彼の友人は、着替えのために一旦家に帰るのであった。車は Grafton Street めざしてゆっくりと走り出した。2人の青年は、群衆の人混みを押し分けながら進んだ。彼らは北に向かって歩き始めたが、歩くという行為には奇妙な失望感があった。街は彼らの頭上に青白い円形の灯をともらせ、あたりには夏の夕暮れの霞が広がっていた。(第7段落)

ジミーの家では、今晚の会食の件が特別の出来事として宣言された。両親の戦きに、ある種の誇りが混ざりあった、また、はめを外してみたいというある種の熱も。外国の大都市の名前には少なくともそれだけの力があつた。それに、ジミーは正装するととても立派に見えた。ジミーが玄関ホールに立って、ドレス・タイの結び目に最後の調整の手を入れていると、彼の父親は、自分の息子に、金ではまず買えないような資質を身に付けてやったことに——商業的な意味においてさえも——満足を感じていたかもしれない。それもあるのか、父親はいつになくヴィローナに対しても親切で、その態度には、外国人の教養に対する、うわべだけに留まらない敬意が表れていた。しかし、家の主人のこの奥床しい礼儀は、ハンガリー人には通じていないようであった。彼は、彼の夕食に対する鋭い欲求を感じ始めていたのである。(第8段落)

夕食は素晴らしいものであつた、絶妙の味わいであつた。セグアンは——そうジミーは結論した——非常に洗練された趣味の持主だ。一座には、新たに1人、ラウスというイギリス人が加わっていた。ラウスは、ケンブリッジでセグアンと一緒にいるところをジミーは見たことがある。青年たちの一団は、電気のキャンドル・ライトのともる居心地のいい部屋で夕食の卓を囲んだ。彼らの口は滑らかになり、腹蔵のない言葉が交わされた。ジミーの想像力は掻立てられ、2人のフランス人の生き生きとした若さが、イギリス人の態度の堅固なフレームに絡み付いているイメージを浮かばせた。なかなか優美なイメージだ、と彼は考えた。それに核心をついたものでもある。彼はホスト役を務めるセグアンの、会話の流れをさばいていく手際の良さに舌を巻いた。5人の青年の趣味は多様であり、その舌はますますほぐれていった。ヴィローナは、穏やかな驚きの表情で応じるイギリス人のラウスに向かって、イギリスのマドリガルの美しさを指摘し、ああした古楽器が失われていくことの嘆かわしさを弁じ始めた。リヴィエールは、必ずしも純粋な気持ちからではなかったが、ジミーに、フランスの自動車技師たちの勝利について説明を試みようとした。ハンガリー人の朗々とした声はあたりを制し、ロマン主義の画家たちが描く紛い物のリュートを笑いものにしようとし始めるのを見ると、セグアンは一座の話題を政治の方向に巧みに誘導していった。ここに全員が興味を同じくする場があつた。ジミーは、いろいろな刺激

を受けたために、父親がかつて心の底に埋没させてしまった熱情が、彼の心の中で息を吹き返すのを感じた。彼は、鈍重なラウスをついに興奮させた。部屋は倍の熱気を帯び、セグアンの仕事は刻一刻と困難さを増した。個人的な怨恨を残す危険性すら出てきた。機敏なホストは、機を捉えて、人類に対する祝杯を挙げ、グラスが干されると、意味あり気に窓を開け放った。(第9段落)

その夜、街は首都の相貌を帯びていた。5人の青年は Stephen's Green に沿って、香り高い煙に包まれながら歩いていった。彼らは肩にマントを掛け、陽気な大声で話した。行き合う人々は彼らに道を譲った。Grafton Street の角に出たとき、背の低い太った男が、2人の美しい女性を、もう1人の背の低い太った男の座った馬車に載せていた。馬車は走り去り、残った男は、青年たちの一団を目にした。

——アンドレ。

——ファーレー！

それからひとしきり話しが弾んだ。ファーレーはアメリカ人であった。話しがどうなっているのか誰も分からなかった。ヴィローナとリヴィエールがもっとも声高にしゃべっていたが、誰もが興奮していた。彼らは馬車に乗り込み、大笑いしながら身を押し込めあった。彼らは、今夕暮れの柔らかな色彩の中に溶け込んでいる群衆を過ぎ、陽気なベルの音楽に合わせて進んだ。Westland Row で汽車に乗り換えると、ほんの数秒で——そうジミーには思えた——Kingstown Station を出ていた。改札係はジミーに挨拶した。彼は老人であった。

——Fine night, sir! (第10段落)

穏やかな夏の夜だった。港は彼らの足元に、暗い鏡のように横たわっていた。彼らはそちらに向かって腕を組んで進んでいった。Cadet Roussel を合唱しながら、リフレインののところに來るたびに足を踏み鳴らした。

——Ho! Ho! Hohé, vraiment!

彼らは船曳場から手漕ぎボートに乗り込み、アメリカ人の持っているヨットへと向かった。軽い食事、音楽、それにカードが待っている。ヴィローナが確信にあふれて言った。

——It's beautiful! (第11段落)

キャビンには、ヨット用のピアノがあった。ヴィローナが、ファーレーとリヴィエールのためにワルツの曲を弾いた。ファーレーが伊達男、リヴィエールが婦人の役になって踊った。それから即興のスクエア・ダンスが始まった。めいめいの男が独自の役柄を考案した。何という楽しさ！ジミーは積極的に自分の役柄を踊った。これは、少なくとも世の中を見ろということだ。やがてファーレーが息を切らし、Stop! と叫んだ。1人の男が軽食を運び込み、青年たちはテーブルについたが、それは形だけで、彼らは飲み始めた。これがボヘ

ミアン流だ。彼らはアイルランド、イギリス、フランス、ハンガリー、アメリカ合衆国に乾杯を捧げた。ジミーは立ってスピーチを始めた。長いスピーチだった。ヴィローナは、間が開いたときにはいつも Hear! hear! と言った。ジミーが座ると大きな拍手が起こった。いいスピーチだったに違いない。ファーレーが彼の背中を叩いて大声で笑った。何という愉快的仲間だろう！何という素敵なグループだろう！（第12段落）

さあ、カードだ、カードだ。テーブルが片付けられた。ヴィローナは、静かに自分のピアノに戻り、4人のために voluntaries を弾いた。彼らは、冒険の中へと大胆に身を投じ、延々と勝負を続けていった。彼らはハートのクイーンに、そしてダイヤのクイーンに乾杯した。ジミーはぼんやりと観客の不在を感じた。座の機知は閃きわたっていた。賭金がつり上げられ、紙が回され始めた。ジミーは誰が勝っているのかははっきりとは分からなかったが、自分が負けているのだということは分かっていた。しかしそれは彼自身が悪かったのだ。彼はしばしばカードを切り間違えた。ジミーのために他の者たちが彼の借金を計算しなければならなかった。彼らは猛烈に素敵な連中だ。だがジミーはもうやめにしてくれればいいのと思った。夜も随分更けている。誰かが、ヨットの The Belle of Newport に乾杯の音頭を挙げ、続いて誰かが最後の大一番を提案した。（第13段落）

ピアノの音はもう鳴り止んでいた。ヴィローナはデッキに上がっていったのに違いない。恐ろしいような勝負だった。彼らは勝負の最後の局面に差し掛かったところで手を置き、幸運の女神に乾杯した。ジミーは、勝負はラウスとセグアンの間で争われていることを理解した。何という興奮！ジミーも興奮していた。彼が負けになるのは分かっていた。いったいいくら借金ができたのだろう。男たちは立ち上がり、最後の腕を振るった。話し声と身振りがさざめいた。ラウスが勝った。キャビンは青年たちのどよめく歓声で揺れた。カードが束ねられ、勝ち分が集められた。ファーレーとジミーが最も大きく負けていた。（第14段落）

ジミーは朝になれば後悔することが分かっていたが、今のところは休めることが嬉しかった。自分の愚行を覆い隠してくれる茫然自失の暗がりを嬉しく感じた。彼はテーブルに前かがみに肘をつき、両手の中に頭を埋め、こめかみの鼓動を数えながら休めた。やおらキャビンのドアが開き、そこにハンガリー人が灰色の光線の中に立っているのが見えた。

——Daybreak, gentlemen!（第15段落）

II

「レースの後で」は、「姉妹たち」「イヴリン」に次いで、1904年12月17日に、*Irish Homestead* に発表された作品である（*Irish Homestead* への掲載はこれで打ち切りとなる）が、

『ダブリンの人々』15篇の中では、幾分異色の作品となっている。弟のスタニスラウスの回想によれば、ジョイス自身もこの作品が好きではなかったが、すでに発表した作品には作家の責任が掛かっているという立場から大幅な書き換えは慎んだということになっている。⁽³⁾ 実際、「レースの後で」は、『ダブリンの人々』の中で、ジョイスの主意が奈辺にあったのかを探る上でも、また、文学的感興という点でも、他の傑作群に比すると、最も焦点の絞りにくい作品の1つになっている。周知のように、この作品の背景には、現実 1903 年 7 月 3 日にダブリンで開催された Gordon Bennett Cup Race があり、現実のレースでもベルギーの選手が運転する Mercedes が優勝し、2 位、3 位をフランス勢が占めた。⁽⁴⁾ 登場人物のセグアンとリヴィエールはフランス人、ラウスはイギリス人、ファーレーはアメリカ人、ヴィローナはハンガリー人という、国際色豊かな設定で、しかも、ヴィローナを除けば、他の『ダブリンの人々』の作品とは異なり、豊かな階級に属している。ラウスという名前、ヴィローナという名前は、当時ジョイスがパリで交わっていた Bohemian タイプの友人たちから採られている。⁽⁵⁾ 人物関係は必ずしも明確に述べられていないので一部推測も交えねばならないが、セグアンとリヴィエールは従兄弟同士で、恐らくパリに住み、この度のレースに、セグアンの所有している車を参加させるために、連れ立ってダブリンに来ていて、今ホテルに滞在している。近々パリで自動車の会社を設立する計画で現在その資金を集めており、実現の暁には、リヴィエールがその経営を担当することになっている。ジミーはケンブリッジでセグアンと顔見知りになった。ジミーは、Dublin University 時代に motoring circle との交わりがあったから、その関係でセグアンに接近したように見える。ハンガリー人のヴィローナは、“Jimmy and his Hungarian friend sat behind” (Italics mine.) (第 4 段落)、“Jimmy and his friend alighted” (Italics mine.) (第 7 段落)、“Jimmy and his friend... were to go home to dress” (Italics mine.) (第 7 段落)というように強調してあるところを見ても、ジミーの友人として仲間に加わっているだけで、例えばケンブリッジでセグアンたちと交友があったとは考えにくい。ジミーは、大学時代に musical circle との交友もあったということなので、Dublin University でかどうかは別としても、音楽への関心を通じて交友関係を結んだと思われる。しかし、彼だけが貧乏であるという設定は注目すべきであろう。イギリス人ラウスは、ケンブリッジ時代に、セグアンと一緒にいるところをジミーが見たことがあるとなっているから、ジミーとの交友は以前にはなかったのであろう。彼がなぜこのダブリンにいるのかは全く不明であるが、夕食に来ることは予め定めてあったような書き振りである。アメリカ人ファーレーは、偶然に道で会って合流したわけだが、“André” “It’s Farley!” というやりとり、また船上で、リヴィエールとダンスを踊っているところからすると、リヴィエールと特に親しい友人であると思われる。自分のヨットを所有しているところを見ても、裕福な階層の人間である

う。しかしこの「国際性」は、表面上和気藹々裡に描かれてはいるが、底には nationalism と人種の問題が、潜在的な対立の影を宿していることを見逃してはならない。言うまでもなくイギリスとアイルランドの間の対立感情は、ジミーとラウスの言い争いに見られるように根深いものとして意識されているし、冒頭部で、アイルランドの群衆が青い車に格別の歓呼の声を挙げるのも、フランスが、反イギリスという意味での利害の一致から、アイルランドの味方と目されているからである。アメリカは、この作品が執筆された当時はまだ新興国であって、現在のような超大国にはなっていないが、アイルランド系移民が数多く渡っていることもあって、アイルランド人の対米感情には親しいものがあると思われる。あるいは、ダブリンにヨットで来ていることからして、ファーレーもアイルランド系移民の1人かもしれない。リヴィエールもフランス人であるが、生まれたのはカナダで、そうするとファーレーとリヴィエールは、新大陸という点で通じるものを持っていることになる。ヴィローナの母国ハンガリーは、ヨーロッパの中では、アジア系の血脈を持つという点で人種的に異質な部分があるが、他国の支配に苦しんできた（そしてこの作品の執筆当時でも、オーストリアの支配下にあった）という点、それから圧倒的な貧しさという点で、アイルランドと共通するものを持っている。「レースの後で」の中でのヴィローナの描写は、ジミーに次ぐ分量を占めていて、決して「国際性」に彩りを添えるためだけの存在ではない。もとより、カー・レース自体が nationalism の産物であって、レーサーも観客も、誰がではなく、どの国の車が勝つかということに関心を集中させる。6人の青年の関係にも、国としての勢力関係が反映してくる。ジミーのセグアンたちに対する態度には、明らかに劣等意識が働いている。ヴィローナとジミーを後部座席に寄せ、肩越しに笑いや軽妙な言葉を投げて寄越すフランス人に対し、“often Jimmy had to strain forward to catch the quick phrase. This was not altogether pleasant for him, as he had nearly always to make a deft guess at the meaning and shout back a suitable answer in the teeth of a high wind.”（第4段落）というような態度、またレーサーに紹介してもらい、緊張でくぐもりがちな声に対して相手が微笑んでくれたことをこの上ない名誉のように思うところ（第5段落）には、卑屈さすら感じられる。そこには、アイルランドの未だ独立を達成していない国情、その貧しさが反映しているのは論を俟たないが、他方、類似した状況にあり、またジミーよりも経済的に恵まれていないハンガリー人ヴィローナが、車の中ではあたり構わずハミングを続け、フランス人が彼に興味を示さないのと同程度に、フランス人が何を言っているかに気を取られてないなど、少しも臆したところを見せていないのは、自分がある意味で売っているジミーと対照的な態度となっている。ただし、ヴィローナが、アイルランドの歩むべき道を示す人物として造形されているとは断定しにくい。彼を幸福にするものは、よい食事だと音楽だけであり、彼の発する言葉として紹介されているのが、

最後の場面を除けば、“It’s beautiful.”と“Hear! hear!”だけであり、彼はカー・レースにもカード勝負にも深い関わりを持とうとしない。良く言えば“optimist”であるが、悪く見れば、彼にとっての交友関係は、よい食事にあるつくための方便でしかないかの如くである。“this subtlety of his host was probably lost upon the Hungarian, who was beginning to have a sharp desire for *his* dinner.” (Italics mine.) (第8段落)や、“Villona returned quietly to *his* piano and played voluntaries for them.” (Italics mine.) (第13段落)という箇所などを見ても、他人のものでも自分のものとしてしまう自己中心的な性向が幾分戯画的に表現されているし、全体的に見ても、明らかに comical な人物としての印象が強いと思われる。

カー・レースは nationalism を表象しているだけではない。それはまた機械文明の表象でもある。20世紀は結局自動車の世紀となったが、この作品に登場する車は、その草創期のものである。ジョイス自身のカー・レースに対する興味は、極めて低く、Ellmann は、“Joyce’s opinion of auto racing was, he said, like the opinion of horse racing of the late Shah of Persia. When the Shah was invited by King Edward to go to the races he replied, ‘I know that one horse runs quicker than another but which particular horse it is doesn’t interest me.’”と註している⁽⁶⁾が、“auto”の人間に対して持つことになる impact を、この時期に既に明確につかんでいることには驚かされる。群衆は、レーサー一人ではなく「青い車」めあてに群がる。歓呼の声は、機械に向けられ、中に押し込められた人間が、それに“smiles and nods”で応える（それ以外では応えようがない）ところ（第2段落）、また、explicit すぎるきらいもあるが、“The journey laid a magical finger on the genuine pulse of life and gallantly the machinery of human nerves strove to answer the bounding courses of the swift blue animal.”（第6段落）という人間の生命と機械との逆転、“The car steered out slowly for Grafton Street...”（第7段落）という、機械自体の主体性の強調などに、機械が人間に対する深刻な challenge になっていることがはっきり意識されている。冒頭部の“groove”を“pellets”のように飛んでくる機械という表現には、明らかに性的な metaphor があるが、それは恣意的なものではなく、アイルランドの胎内に機械文明を disseminate しようとする大きな潮流として描かれているのだと思われる。

機械は、人間の空間と時間の関係を変質させ、神経に「機械的な」興奮を齎す。車から降りたジミーとヴィローナの、“They walked northward with a curious feeling of disappointment in the exercise...”（第7段落）という反応には、人工的な興奮に対する一種の中毒症状が暗示されている。機械は、近代の「都市」の本質的部分を形成する。“They drove down Dame street. The street was busy with unusual traffic, loud with the

horns of motorists and the gongs of impatient tram-drivers.”（第7段落）という、われわれの見慣れた都市風景は、機械という怪物が闊歩し、人間が“A little knot of people collected on the footpath to pay homage to the snorting motor.”（第7段落）と臣従を誓う場所になる。その夜、ダブリンが、“That night the city wore the mask of a capital.”（第10段落）という変貌を示してくれたのも、こうした機械の祭典のお蔭でもある。

カー・レースが表象しているもののひとつの重要なモチーフは capitalism である。この点については、James Fairhall の essay⁽⁷⁾ が関連する情報を提供してくれている。Fairhall は、偶然に見つけた、このレースに対する、当時のアイルランドでの期待を述べた1903年の1月17日、20日の *Irish Times* の記事を紹介しているが、それによれば、アイルランドは、国際的レースを誘致することに伴う、経済的効果に大いに期待している様子が窺える。また車を出場させる側も、経済的効果に対する計算を働かせていることは言うまでもない。実際に、セグアンにはその目的があり、彼が今日上機嫌なのは、自動車工場が出来る前に予約注文を得たからであり、それが、フランス車の“virtual victory”という nationalism に優先している。この6人の青年を、少なくとも表面上、和気霽々と集わせている本当の理由は、やはり金銭である。

よく指摘されることの繰り返しになるが、セグアンの目論見は、ジミーの金を如何にして確実に投資させるかにあり、彼が果して触れ込みどおりの富豪の御曹司であるかどうか、 “[Ségouin] was *reputed* to own some of the biggest hotels in France.” (Italics mine.)（第3段落）； “... Ségouin had *managed* to give the *impression* that it was by a favour of friendship the mite of Irish money was to be included in the capital of the concern.” (Italics mine.)（第6段落）； “... Ségouin had the unmistakable *air* of wealth.” (Italics mine.)（第6段落）という箇所等を見ると、何とはなしに危ぶまれて来るのである。特に2番目の抜粋部には、それがかなり強く匂わされている。そうすると、ジミーをフランスのカー・レーサーに紹介したのも、ジミーに積極的に話しかけるのも、全てジミーの「外国かぶれ」を利用しているようにも思われてくる。夕食の場面で、ヴィローナが、ラウスに向かってイギリスのマドリガルの美しさを述べる条で、ラウスは「穏やかな驚き」を見せ、リヴィエールが、“Rivière, *not wholly ingenuously*, undertook to explain to Jimmy the triumph of the French mechanics.” (Italics mine.) という行為を取るの、ヴィローナの「野暮」な話題を転じようという試みに解せるが、同時に、それに応じることが出来ない精神的空白をも暴露しているように感じられる。そんな心理的機微に頓着しないヴィローナは、朗々たる声を響かせて、楽器の話しを継続しようとし、リヴィエールがそれに抗し難くなると、セグアンが巧みに助け船を出している。しかし、転じた先の話題が政治の領域というのは、政治の話題が出て剣呑な雰囲気が醸成されそうになると、例

えば芸術の領域に話題を転じたりするという一般的なホストの役割とは逆になっている。しかし、政治が話題になれば、当然ジミーとラウスの間に論争が起こるのは目に見えている。そうして、頃合いを見計らって、「人類」に乾杯を上げさせ、外に連れ出しているところなどを見ると、各人の反応を読みきっているとも言える訳で、そういう意味では誠に如才ない社交術を身に付けていると言えよう。ジミーの「愛国心」も、手玉に取られている感がある。ヨットの中で、青年たちはそれぞれの国に乾杯を捧げるが、“Ireland, England, France, Hungary, the United States of America” という順番にもさりげなく、外交的奸智が籠められているような気がする。当地のアイルランドに最初に乾杯するのは、儀礼上自然だとしても、国力からすれば身に余る光栄ということになる。ジミーが立ってスピーチを始めたのは、誰かの巧みな誘導があったかも知れないが、とにかく彼がすっかりいい気分になっているのは手に取るように分かる。the great powers の海千山千の外交術にたわいもなく酔い痴れてしまうのである。

「レースの後で」の後半部分は、船室中で行われるカード勝負が焦点になっている。それは、カー・レースと呼応しあう形で、勝負の興奮と、その後の空しい感覚を描き出す装置になっているのだが、同時にそれは、ジミーがこれから行おうとしている、セグアンの事業に対する投資が挫折するであろうという強い暗示を読者に与えずにはおかない。

III

こうしたジミーの挫折は、『ダブリンの人々』の統合的主題である「麻痺」(paralysis)を顕現しているのだが、では一体何がジミーの生命を蝕んでいるのだろうか。様々なことが考えられるであろうが、ここでは彼の父親の存在を指摘しておきたい。ジミーはセグアンたちの意のままに操られる easy prey であるが、実はこの作品で最も周到に描かれていることの1つは父親の支配である。ジミーの行動のほとんど全てが父親の指令に基づいている。父親は、息子をイギリスの“big Catholic college”(予備校的性格の中等教育機関であろう)に、次いでダブリンに呼び戻し、Dublin Universityで法律を勉強させる。さらに箔づけのため、そして「世間を見させる」ために一学期間の短期留学という形で再びイギリスのCambridgeに送る。そしてもう潮時だと判断すると、ダブリンに呼び戻している。セグアンとの交際を得たものCambridgeであり、その意味では、父親の思惑どおりだったということになる。“Such a person [as Séguin] (*as his father agreed*) was well worth knowing...” (Italics mine.) (第3段落)を見ても、ジミーが自分の交友関係にまで父親の承諾を気にかけていることが窺える。さらに、“Jimmy had a respect for his father’s shrewdness in business matters and in this case *it had been his father who had first*

suggested the investment ; money to be made in the motor business, pots of money." (Italics mine.) (第6段落) には、この投資行為そのものが父親の意図であったことが明確に述べられている。"suggestion" はジミーにとっては命令に等しいものであったはずである。ジミーが現在どのような仕事をしているのか述べられてはいないが、彼が現在手にしているかなりの金銭を、彼自身が稼ぎ出したとは考えにくい。かなりの部分、ないしは全部が、父親によって与えられたものである可能性が強い。彼はそれを投資という形で——つまりマネー・ゲームによって——生計を営もうとしているのである。金銭こそこの父親が最も価値を見いだしているものであり、"... as he [Jimmy] stood in the hall giving a last equation to the bows of his dress tie, his father may have felt even *commercially satisfied* at having secured for his son qualities often unpurchasable." (Italics mine.) (第8段落) という部分を見ると、息子に施した教育すらもが、商業的打算に裏打ちされている。ジミーは、有閑階級の生活を楽しんでいるようであるが、逆に言えば、経済的に父親の支配下から抜け出せないことを意味しているのである。

父親の影響は、ジミーのものの見方にまで及んでおり、"Jimmy found great pleasure in the society of *one who had seen so much of the world ...*" (Italics mine.) (第3段落) という人物評価基準や、ダンスを踊りながらの "this was seeing life" (第12段落) という感慨には、父親の、「世間を見させる」という教育目標がそのまま復唱されている。さらに、自分がこれからなそうとしている投資についての真剣さを見せる、"... if he had been so conscious of the labour latent in money when there had been question merely of *some freak of the higher intelligence*, how much more so now when he was about to stake the greater part of his substance!" (Italics mine.) (第5段落) という部分に見られる、商業的価値観を、教育的価値観のはるか上におく考え方においても、どの程度内発的かは別にしても、父親のよき後継者となり得る資質を覗かせている。

想像をさらに逞しくすると、この motor business への参入は、父親の長期的な計画の中に予め組み入れてあったのかもしれない。ジミーは大学時代に、"he divided his time curiously between musical and motoring circles" (第7段落) というふうに、自動車に対する関心を示しているのだが、"curiously" という言葉が暗示するのは、自動車に対する関心と、音楽に対する関心との使い分けに、どこか木に竹を接いだようなところがあったということである。その不自然さは、セグアンたちとの交際と、貧しいヴィローナとの交際という不調和に持ち込まれているといえよう。つまり、ジミー本来の自然な性向は、芸術的な分野への関心が深いのである——それは、"Jimmy, whose imagination was kindling, conceived the lively youth of the Frenchmen twined elegantly upon the firm framework of the Englishman's manner. A graceful image of his, he thought, and a

just one.”（第9段落）という詩的想像力を誇る箇所にも現われている——が、恐らくは、父親の「示唆」によって、motoring circle との交際が、「人為的に」始められたのではないだろうか。

冒頭部で、レースを終え、帰還してくる車の中で“hilarious”な青年たちに混じって、“The fourth member of the party, however, was too excited to be genuinely happy.”というように、ジミーはどの面から見ても十分に幸福になる理由があるはずなのに、幸福になりきれていないのは、どうしたわけなのであろう。セグアンたちに話しかけられているのを、前に屈むようにして聞こうとするジミーの“unpleasant”な気持ちを助長しているものの1つに、“the noise of the car”が含まれているのは、少し注目してもいいような気がする。

「レースの後で」の語りは、部分的には客観的な narrator の声を響かせるときもあるが、かなり多くの部分で、ジミーの意識という視点が重ね合わされており、ジミーの意識の発しているコメントは、“devils of fellows”との交友の楽しさを強調したものになっている——ダンスに興じるときの、“What merriment! Jimmy took his part with a will; this was seeing life, *at least.*” (Italics mine.) (第12段落)、酒を飲むときの、“They drank, *however.* it was Bohemian.” (Italics mine.) (第12段落)、スピーチを終えた後の、“What jovial fellows! What good company they were!” (第12段落)、最後の勝負を前にした、“What excitement! Jimmy was excited, too; *he would lose, of course.*” (Italics mine.) (第14段落)——が、それらをその文脈においてよく読んでみると、やはりそれほど幸福そうではない顔が浮かんでくるのである。それは、無理をして自分を興奮に駆り立てようとしている人間の意識のように思われてくる。

ジミーが、放蕩生活に真の愉悦を感じる質の人間ではないことは、“Jimmy who, in spite of temporary errors, was at heart the inheritor of solid instincts knew well with what difficulty it had been got together. This knowledge had previously kept his bills within the limits of *reasonable recklessness . . .*” (Italics mine.) (第5段落) という文章にも表れていて、彼自身もそうした点には自負心すら持っているようにも見える。

「レースの後で」には、幾つか構成上の工夫が施してあるが、ジミーの意識が、興奮と酒の影響で次第に朦朧とした状態に変化していつているというのもその1つである。先に引用した、フランス人の若々しさがイギリス人の堅牢さに絡み合っている想像、ラウスを政治的議論に駆り立てる箇所などを見ると、既に夕食の場において、多少のアルコールが入っているのではないかと推測される。それから外出して、ファーレーが合流する時の、“No one knew very well what the talk was about.”という叙述は、その後の一行の行動を見れば、何が打ち合わされたかは明らかであるから、誰も分かっていないというのはジミー

の勝手な思い込みであって、このあたりから、主人公の意識は幾分怪しくなってくる。汽車に乗っている時間が数秒に感じられ、気が付いてみたら駅を出ているところだったり、群衆が夕景の中に溶け込んで見えたり、いずれも酔いがまわってきた兆候である。ヨットに着き、ダンスを踊り、乾杯を重ねる頃には、すっかり酩酊状態となっていて、スピーチをしても、“It must have been a good speech.” というのは、どんな内容であるか自分でも分からなくなっている証左である。さらに、カード・ゲームが始まり、また乾杯が重ねられ、ジミーはカードの切り方はもとより、誰が勝っているのか、自分はいくら負けているのか計算もできないような状態に陥っている。そして何もかも終わったときには、悪酔いに痛む頭を抱えることが出来るだけとなっている。これらは全て、ジミーが、酒やダンスや勝負事が本質的に体質に合っていないことを物語っている——そしてそのことが、他のジミーの熱っぽい賛辞に対しても、読者の懷疑を呼んで、ジミーは、本当は車に対しても、その言葉ほど熱中していないのではないかという懸念を抱かせるのである。

ジミーの父親は、最初は屠殺業を営み、それで貯めた資金を運用して、幾つかの店舗を経営するようになり、「運よく」警察関係方面への調達の仕事も得て財を築き上げたのだが、注目すべきなのは、息子の放蕩に対する処置について言及した、“His father, remonstrative, but covertly proud of the excess, had paid his bills and brought him home.”

(第3段落) という条である。口では諫めたものの、内心はそうした放蕩生活を送る息子を誇りに思っていたという心理は、どのような環境から醸成されたのであろうか。ここでも様々な推測が成り立つであろうが、この父親の中に、事業を拡大していく野心や、それを実現していく上での世間知があることには疑問の余地が無い。警察関係への調達の仕事にしても、運だけで得られるものではないであろう。

この父親は、最初に“advanced Nationalist”であったのだが、早々とその見解を修正して、商売にいそしむようになっている。商売をうまく運ぶためには、当時のアイルランドを牛耳っていたイギリス人や Anglo-Irish の機嫌を損ねてはならなかったであろう。また、彼の野心が、自分が劣等感を抱いている諸外国との、しかも最先端の企業である自動車産業に目をつけるというのは自然な流れとして理解できる。すると、彼が息子を、イギリスの学校、Anglo-Irish の牙城 Dublin University、さらに Cambridge に送り込んだ動機の中にもそうした思惑があったとしても不思議ではない。こうしていわば祖国を裏切る形で、彼は蓄財したのであり、そうした moral corruption が、放蕩という corruption を容認する心性を育てる苗床になっている。また、自分には出来なかった外国での放蕩生活を、息子を通じて果たすという深層的な願望も働いていたかも知れない。それはとにかく、ジミーは、自分の心の中に眠っていた Nationalist としての衝動を、酒の力を借りてラウスにぶつけるが、それは、セグアンの人類愛という美辞麗句の大義の前に力を失ってしまう。ヨッ

トの中で行ったスピーチはどのようなものであるか一切触れられてはいないが、酔っているためにかなり間の悪いものであったこと（それは、ヴィローナが、合いの手を入れて埋めてくれている）、ファーレーに肩を叩かれ大笑いされていることからして、ジミーが感激して述べたことがまともに相手にされていないことなど、それとなく察せられるのであるが、その内容についても、恐らく、セグアンの言った人類愛の称揚といった線に沿うものであったろうこと、つまりさっきの nationalism の熱弁の舌の根も乾かぬうちの変節を見せたであろうことは確実であると思われる。そうすると、ジミーは、父親の辿った経歴を、ほんの短時間のうちに追体験していることになる。放蕩すらも、父親の思惑の枠の中で生きる息子——こうした呪縛は、前作の「イヴリン」において、母親の生がその娘を呪縛していたのと好一対をなしていると言えよう。

この父親と息子の間の、精神の腐敗の共鳴は、服を着替えに家に帰って、夕食会のことが告げられたときの描写——“A certain pride mingled with his parents' trepidation, a certain eagerness, also, to play fast and loose for the names of great foreign cities have at least this virtue.”（第8段落）——に意図されているように感じられる。“a certain pride”とか“a certain eagerness”は、一体誰のものなのかははっきりしない書き方になっていて、ジミーのものだと解釈すれば、親が戦くのを見て、誇らしい気持ちになり、羽目を外してみたい誘惑に駆られたという意味になる。しかしそれだけなら、もっと明確な表現が選ばれたはずで、この幾分 contrivance を感じさせる文章には、そこで、親子の感情が、どちらのものとも不分明なほど輪郭を失い、溶け合っている様が意図されているのではなかろうか。しかしこうした spirit の不健全な柔弱さは、何も、この一家に限ったことではなく、ダブリンの人々が多かれ少なかれ共有しているものでもあろう。丘の上に集まった群衆は、お目当ての「青い車」が現れると、“the cheer of the gratefully oppressed”を挙げる。それは、植民地化に慣れてしまった民族の悲しい宿命の響きを帯びている。

IV

しかし、なぜジミーの父親の野心は挫折させられねばならないのであろうか。ジミーが尊敬している父親の商才は、なぜセグアンへの、危険と思われる投資を選択してしまったのであろうか。屠殺業から幾つかの店の経営へという商売の手の広げ方によって、父親は“merchant prince”とまで呼ばれるようになったが、彼の目は、自動車産業への投資をどのように捉えていたのであろうか。彼の“solid instincts”を継承しているジミーは、車に座りながら、“Jimmy set out to translate into days' work that lordly car in which he sat.”（第6段落）という作業を始めている。言うまでもなくそこには金銭を稼ぐことには

日々の労働の裏打ちが必要であるという、父親の商売上の考え方が反映しているに違いない。しかし、今度ダブリンに上陸してきた資本主義の精神は、そうした旧式な商売のやり方が通用しない面を持っている、ということに、この父子は盲目であるように思われる。自動車は、一人が何日かけて作り上げる製品ではない。さらに、投資は、賭けを伴うものとなり、冒険に対して臆する精神、“reasonable recklessness”を信条とする精神は、最初から敗者の烙印を押されているに等しい。ジミーの父親は、外国からやってきた新しい機械文明に魅惑されているが、その本質は掴みそこねている。

ジミーの興奮を作り出している3つの原因として、speed、notoriety、moneyが挙げられているが、これら3つのものこそ、現代の「文明」を創りだしている新しい神々と言ってもよい。静かな幸福は、神経的な興奮に道を譲り、都市はそれによって人工的な生命を得る。ジョイスがパリで、恐らくこのカーレースに出場したと思われる Henri Fournier というフランス人にインタビューをした“The Motor Derby”という記事が、1903年4月7日の *Irish Times* に掲載されたのはよく知られていて、この Henri Fournier がセグアンのモデルではないかとされているのだが、そこに皮肉を交えて描かれた情景は、まさにそうした新しい文明の harbinger になっている。

In the Rue d'Anjou, not far from the Church of the Madeleine, is M. Henri Fournier's place of business. 'Paris-Automobile' —a company of which M. Fournier is the manager— has its headquarters there. Inside the gateway is a big square court, roofed over, and on the floor of the court and on great shelves extending from the floor to the roof are ranged motor-cars of all sizes, shapes, and colours. In the afternoon this court is full of noises —the voices of workmen, the voices of buyers talking in half-a-dozen languages, the ringing of telephone bells, the horns sounded by the 'chauffeurs' as the cars come in and go out— and it is almost impossible to see M. Fournier unless one is prepared to wait two or three hours for one's turn.⁽⁸⁾

「レースの後で」が『ダブリンの人々』の中でも特異な印象を与えるもう1つの理由は、物語の中で、女性の影が極めて薄いということである。ファーレーが馬車に乗せている2人の女性の存在と、ジミーが家に帰ったときの、“parents' trepidation”という形で母親の存在が確認できるが、いずれの場合も、具体的な描写は欠如している。後は、リヴィエールの演じる女性、The Belle of Newport というヨット、カードのなかの Queen of Hearts 及び Queen of Diamonds が、女性の imitaiton として、登場してくるばかりである。あるいは、ジョイスが別なところで述べている、イギリスの homosexual な性向を助長しやす

い教育制度⁽⁹⁾が意識されているのかもしれないが、ここではそれよりもむしろ、機械文明の sexless な性格が強調されていると考えるべきであろうか。先に見たように、車の中に押し込められた人間は、神経を機械に一体化させることによって、本当の意味での masculinity を次第に失っていく。すでに26歳になるジミーには、それらしき恋人がいるとも思われない。

物語の流れにおいて、最初は多くいた群衆は、次の場面では一塊だけの群衆になり、さらに次の場面ではまばらな通行人に、そして次第に夕景に溶けていく朧ろな存在になり、最後には年老いた一人の駅員になってしまう。海の上に出てからは、6人の青年は、群衆から切り離された空間に閉じ込められるという設定がなされている。そのことを、酔いのまわったジミーは、“Jimmy felt obscurely the lack of an audience.” (第13段落) というふうにぼんやりと意識する。彼を支えてきた一つの支柱であった “notoriety”、つまり観客の反応が失われてしまったのである。

海に向かって Cadet Roussel を唄いながら、腕を組み、リフレインの部分で足を踏みならしながら進んでいったのが、おそらくこの Bohemian 生活の最後の華だったのかもしれない。“darkened mirror” のような海面に浮かぶ船の中に入ると、青年たちの行状は、愚かしいものに堕し始め、カード勝負に入ると、これまで表向きの美観や興奮に隠れていた真の動機が現われ始めている。ヴィローナの弾いていた voluntaries は勝負の最高潮の部分では鳴り止んでいる。それは、穿って考えれば中心的な hymn が silence, void であるという irony にも解釈できる⁽¹⁰⁾が、その解釈が妥当かどうかはともかく、興奮の後の空疎さ、白々しさが、周囲の喧騒にもかかわらず、ジミーの意識を領し始めていることを読者は印象づけられるのである。

灰色の朝の光りを背後にして立つヴィローナの “Daybreak, gentlemen!” という宣言は、そうした酩酊状態に対する痛烈な批判となっている。それは恐らく、現代文明が醒めなければならない迷夢に対する批判にもなっているのであろう。ジミーは、しばし自分の愚行を覆い隠してくれる “dark stupor” から追いついてくれるのである。

「レースの後で」において扱われている時間は1日たらずの、ほぼ連続した短いものだが、その中でも、時間の移り変わりが光の変化によって印象的に描き込まれている——“the city hung its pale globes of light above them in a haze of summer evening” (第7段落)、“They drove by the crowd, blended now into soft colors ...” (第10段落)、“It was a serene summer night.” (第11段落)そして最後の“The cabin door opened and he saw the Hungarian standing in a shaft of grey light.” (第15段落)。こうした人工的な都市の上に広がる夕空は、短い描写にもかかわらず、非常に美しく優しい情感を添えている。あ

るいは、この物語に欠けている女性の役割を、この空が果たすことによって、殺伐とした印象を免れているのかもしれない。最初は、何かの皮肉かと思って読まれるであろう、老駅員の“Fine night, sir!”という言葉は、読み返してみると、“Daybreak, gentlemen!”という科白の counterbalance となっていることに気づかされる。そしてそれが、夜明けを告げる声と同じ程度に epiphanic ですらあることを、読者は遅ればせながら悟るのである。

—註—

- (1) テキストには *Dubliners* (Viking Press, 1961) を使用した。
- (2) 段落設定は幾通りか考えられるが、①“The cars... the French.” ②“The French, more-over... genuinely happy” ③“He was about twenty-six... but, unfortunately, very poor.” ④“The car ran on merrily... the noise of the car, too.” ⑤“Rapid motion through space... a serious thing for him.” ⑥“Of course, the investment... the swift blue animal.” ⑦“They drove down Dame Street... a haze of summer evening.” ⑧“In Jimmy’s house... a sharp desire for his dinner.” ⑨“The dinner was excellent... threw open a window significantly.” ⑩“That night the city... Fine night, sir!” ⑪“It was a serene summer night... It is beautiful.” ⑫“There was a yacht piano... What good company they were!” ⑬“Cards! Cards!... one great game for a finish.” ⑭“The piano had stopped... the heaviest losers.” ⑮“He knew that he would... Daybreak, gentlemen!” と15段落に分ける。(引用部分の段落の表示はこれによる。)
- (3) Stanislaus Joyce, *My Brother’s Keeper* (Faber and Faber, 1958), p. 200 参照。
- (4) *ibid.*, p. 223 参照。
- (5) “At a café in the Carrefour de l’Odéon he joined in excited discussions with other expatriates, Riciotto Canudo from Italy, Teodor Däubler, a German born in Trieste, Villona, a Frenchman, and Eugene Routh, of origin unknown. They argued about literature in French, and when their knowledge of that language failed, in Latin.” (Richard Ellmann, *James Joyce*, New and Revised Edition, Oxford University Press, 1982, p. 123.)
- (6) *ibid.*, p. 127.
- (7) James Fairhall, “Big-Power Politics and Colonial Economics: The Gordon Bennett Cup Race and ‘After the Race,’” in *James Joyce Quarterly*, Vol. 28, Number 2, Winter 1991, pp. 387–397.
- (8) Ellsworth Mason and Richard Ellmann (eds.), *The Critical Writings of James Joyce*, (Faber and Faber, 1959), pp. 106–107.
- (9) *ibid.*, p. 204 参照。
- (10) *O.E.D.* には、voluntary の意味として、C.2.b. に、“A musical piece or movement played or sung spontaneously or of one’s free choice, esp. by way of prelude to a more elaborate piece, song, etc.” を、また C.2.c. に、“A piece or solo, usu. consisting of two or more movements, played upon the organ before, during, or after any office of the Church; also, the music for this.” を挙げているが、「レースの後で」の文脈には、どちらの意味でも通用するように思われる。しかしいずれにしても、C.2.c.の意味が意識されていることは十分に考えられる。ただし、*Grove’s Dictionary of Music and Musicians* (5th ed., 1954) には、“The voluntary is now used only at the beginning and end of a service. For a long period, however, it was a prominent feature

during the service, being called the ‘middle voluntary.’”とあって、*O.E.D.* の C.2.c. の “during” の部分は少し限定的に考えたほうがよいかもしれない。

また *Grove's Dictionary* には、“... a service may open and close with organ music not less appropriate than the hymns and anthems. Thus used, the voluntary amply justifies itself, both as a decorative accessory and an aid to devotion.” と、voluntary の教会における意義が述べてあって、いずれにしても、“prelude” 的性格の音楽であることが分かる。

ちなみに、*O.E.D.* の C.2.c. の1801年の用例の中に、“The voluntary was originally so called, because its performance, or non-performance, was at the option of the organist.” とあり、その説が正しいかどうかは別にしても、「随意の」という原義が響いているのは間違いがないことで、それはヴィローナの性格、及び近代文明の性格自体と暗合するものになっている。